青い炎

中里恒子

青い炎　奥附

昭和五十七年六月二十五日　第一刷

定　價　一、四〇〇圓

著　者　中里恒子（なかざとつねこ）

發行者　杉村友一

發行所　株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三―二三　郵便番號一〇二

電話東京（〇三）二六五局一二一一

印刷　精興社　製本　加藤製本　製函　加藤製函

萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします

©Tsuneko Nakazato 1982　Printed in Japan

青い炎

中里恒子著

題字——著者

（函裝頓素材　著者藏「泰西古圖錄」）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

電話が鳴つてゐる。

土曜日である。わたしは、仕事に關係のある電話ではないと思つた。庭にゐた。

急いで手すりを傳つて、日光室にはいり、切換へてある卓上機をとつた。

土曜日の電話……嬉しいことであらうか、わたしは、笑顔のやうな氣持で、受話器をもつた。

「はい、さうでございます、」

「覺えていらして下さいますでせうか、加奈子です、あの服部の……」

「服部さん？　三千子さんのあの、」

「はい、をばさまにはお世話になりました、あの服部三千子の娘の……おわかりでせうか、いきなりお電話することを考へましたが、をばさまには、お知らせした方が、母の供養かとも思ひましたので、」

「え？　どうなさつたの？」

「母は、亡くなりました、今日、お葬ひをいたします、」

「……、今日？」
「はい内輪の身内だけでいたします、いらして頂かうなどと思ひはいたしません、突然で、ただ、お知らせしたかつたのです、」
「それはありがたう、落着かれたら、一度お眼にかかりたいわ、加奈子ちゃん……なんて言つても、あなただつて、うちの娘より一年上級でしたね、でも加奈子ちゃん、何ひたいことがいつぱいあるのよ、あれつきりでしたから、」
「はい、お伺ひしてよければいづれ、」
「さうして下さい、今日はお取込みのところ、よく知らせて下さつたわ、ありがたう、」
「母は、亡くなるまで、をばさまのことを話してをりました、ではこれで、」
電話を置いて、わたしは、また庭へ出ていつた。石段に腰かけて、回想的になつた。
服部三千子が死んだ。
娘から、今日葬式だと知らせて來た。わたしは、服部三千子の死を知つたことで、悼む氣持と同時に、生のなかばで、彼女が何年か幸福な日日を過したであらう、そしてそれも終つてしまつた……だから死んでも滿足であつたらうと考へた。
半日でも、一日でも、ああよかつたと有頂天な日があれば、何十年かのいやな日は、あとかたもなくなる。服部三千子は、さうであつたらう。わたしは、さういふ萬事、くどくどしくないところが好きであつた。
わたしが、最後に會つたのは、何年前のことであつたらうか。身にあつた洋服で、靴の音も、しつかりしてゐた。
「……ずつとお勤めで、もう上役でせう、」

「さう、上役でもないけれど、古參で、かなりにやつてゐるわ、四年前に家も建てました、一度、いらして下さらない？」
「えらいこと、もう御心配はないのね、お子さん方も、あの……」
と言ひかけて、わたしはやめた。あの、の中には、三千子の過去が、複雜に含まれてゐるからである。關心はあつたが、そんなことを、もうたづねることもあるまいと思つた、わたしは。
「あの……あのひとは、家を建てることについて、手を貸してくれたのよ、それは、わたしの要求からではありません、向ふで、してくれたから、」
三千子から、さう言ひ出したので、わたしも、益ます、ふたりの關係が、どこからどこまでなのかわからなくなつたが、笑つてゐた。
「いいのよ、その方が、向ふも氣がらくになつたかもしれないし、手傳はせたわ、」
案外、三千子は、ふとい言ひ方をした。さうかもしれない。わたしもさう思つた。
「新しい家で、きまりがついたの、」
「きまりつて？　彼は、來るわ、でも、いまに、來なくなるでせう、來るうちは、來てもいいことにしてゐるの、」
「……」
「どちらも、こだはつてゐないから、」
「偶然、お眼にかかれてよかつた、あなたの新しい家へ、仲なかおたづね出來さうもないし、」
「さう、へんにお思ひでせう、」
「そんなことないわ、しあはせだつたらうと思つてゐたのですもの、」
「あなたは、ずつと同じお住居ね、お手紙します、うちの場所も書いて、」

「ええ、どうぞ、」
「わたし、あなたのところへ伺つてもいいかしら、」
「どうぞ、その方がいいわ、」
「ほんとにあなたは變らないのね、出歩かないのね、それは、幸福でいらつしやるから、」
「さう見える？」
「さうなのですもの、じつとしてゐられるなんて……」
「結構ふらふらしてますよ、ぢや、さよなら、」
「ほんとに伺ふわ、」
そして、ほんとに、たづねて來た。
服部三千子は、だから、わたしの中では、何年も前のその時の姿で、死んでゐる。
わたしより二歳上であつた。充分に若わかしく、美しい面影を殘してゐた。

その年の秋に、三千子は、電話をかけて來た。
「お眼にかかりたいのよ、御迷惑でも、いつかお會ひしてから、どうしても、伺ひたくて、今日にしようか明日にしようかと、土曜日はたいてい御在宅とか、」
「ええ、どうぞ、」
「日曜日はだめよ、なの、わたしは、」
「さうさう、そんな映畫があつた、いらして下さい、あなたは、わたしを羨しがらせたいのね、」
「……反對ですよ、」

庭の花を、籠にざつくり入れて、ありあはせの衣かつぎを作つた。
彼女は着物で來た。派手な柄で、似合はなくはないが、野暮ったい。洋服で、きびきびと外國商社の中でも、敏腕の祕書として動いてゐる姿の方が、ずつと若わかしい。どうして着物で來たのであらう。
「まあこのお宅、前と同じなのに、變つたわ、とても近代と古代が調和してる、」
「なに言つてるの、いろいろ災害にあつて、模樣替へしただけ、設備は、もう人手があてに出來ないから、可能なかぎり、機能的になつてます、ひとりでも充分やれます、」
「そして、御自分を生かしてらつしやる、あなたつて、御苦勞なしのわりには、しつかりしてらつしやる、ひとりで平氣だなんて、その若さで、」
「若さなんて、わたし、惜しくないの、年月が、わたしを作り替へたと思つてる、」
「でも、戀は、またいつ起るかわからないわよ、起つてゐても、あなたは、じつとしてゐられるのだから、さうでせう、」
「もし、さうだとしても、あなたのやうに、子供三人と御主人おいて、家を出てゆく氣力はないわ、」
「……」
「今日は、そんな過ぎた話をしにいらしたのではないでせう、」
「さうね、しても仕方がないことよ、この頃謠と仕舞をしてます、外國のお客さまも多いし、わたしが、接待役をつとめる時もあるので、茶も、花も、習ふ必要があるの、」
「着物を着て、お出になるの、」
「さうなの、それで、衣裳もかなり作つたわ、でも、あなたの縫箔の秋草の帶みたいの、だあれ

も、締めてゐませんよ、この次の週に、公使のレセプションがあるの、その時、いらつしやらない、あの帶をなさつて……びつくりするわ、」
「……、そんなお集りには興味がないの、第一、そんなところへ、ひとりでゆくなんて、エスコートもなしで、」
「それはあります、希望者が、あなたを前から存じ上げてゐるといふ方よ、」
「どなた、」
「須田さんて、物產の……」
「いいえ、わざわざそんなことを誘ひにいらしたの、帶のために、」
「わたしは、自慢に思つてるの、ぱきぱきしたあなたのさういふところ、學校にゐた頃から、」
「よく敎へて頂いたわ外國語、わたし出來なくて……でも震災やなにかで、ゆききもなかつたわね、それで、いつ御結婚なさつたのかも知らなかつたわ、」
「いいわ、わたしの結婚なんて、非人閒的だつたのよ、お知らせするほどのことはなかつたわ、」
「そんなことないでせう、」
「さうだつたの、お話するのも、いやなくらゐに、」
それから、服部三千子は、能の話などして、いかにも樂し氣に、
「……わたし、彼に會はなかつたら、こんな明るい氣持になれなかつたでせう、一生、たとへ、モラルに反すると言はれても、なんでもなかつたわ……だから、もういいの、」
すこし投げやりのやうな、また、自信をもつた日日を誇示するやうでもあつた。
彼女が結婚して、高輪二丁目に住んでゐた頃、わたしは、時折、立ち寄つた。わたしの稽古にゆく師匠の家が、伊皿子の坂を登つて、横にはいつた屋敷町にあり、近かつたからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

服部三千子の家は、戰前、どこにでもある普通の借家で、くぐり戸のついた門構で、かなり古い家であつた。

一家に、中風氣味の父親が、一緒にゐた。元は、大會社の常務ぐらゐにゐたらしいが、一家は、横濱に住んでゐて、震災で、全燒した。それから、十何年か經つてゐる。

わたしが、三千子と同じ學校であつたのは、どちらも、當時、横濱住ひであつたからである。

その後、何年か、音沙汰はなかつた。わたしも結婚して、東京住ひになり、日本橋の百貨店へ買物にいつた。その時に、ひよつこり、彼女に出會つた。

いろいろ話があつて、互ひに、住所を教へあつた。

「あなたは、いい御結婚なさつたのでせう、お買物に、番頭さんがついてゐるし、」

「いいえ、普通の家ですよ、ただ、帳場があるので、わたし、ひとりで買物に來る時は、番頭さんに頼むの、」

「それは、お帳場で買物の出來る信用のある御家庭だからよ、」

もつとも戰前は、ローンの、クレジットの、といふことはなかつた。百貨店は、現金買ひであつた。三千子が、そんなことを大仰に言ふので、變つたなと思つた。

「一度、おたづねするわ、伊皿子まで、お稽古にいつてますから、」

「さう、ぜひおついでに……あなた、お子さんは？」

「ゐますよ、そのお嬢ちやんより、小さいの、外へは、連れて出ません、」

「うちは、さういふわけにゆかないし、外へ出るのを、子供も喜ぶので、」

「可愛いこと、あなたにそつくり……」

彼女は、わたしがさう言つたとき、さうかしらと、微笑しただけであつた。わたしは、そのま

ま別れた。
妻になつた女といふものは、自分の學友とは、たいていが、結婚後は、つきあはなくなる、つきあへなくなるといふ方が、眞實か。
婚家のつきあひ、良人の友人の出入り、さういふことをきちんとしないと、風當りがわるくなるので、自分の友達づきあひなどは、二の次、三の次である。
それに學友といふ一定の線上ではなく、結婚したり、しなかつたり、境遇が變れば、變つたその身邊のつきあひで、結構忙しい。戰後は、がらりと變つたが、以前は、妻自身の交際といふものは、輕視されてゐた。
わざわざ、服部三千子の家を、訪問することは出來なかつたが、わたしは、伊皿子の稽古の日にならば、寄り道する時間があつた。
いつかたづねよう、と思ひながら、またたく間に、一年あまり經つた。
伊皿子への稽古も、いつまで續けられるかわからない。戰爭が始つてゐたからだ。
或る日、お稽古が早く濟んだので、わたしは、三千子の家に立ち寄つた。
杖を突いた老人が出て來た。
三千子が、あとからついて來て、
「ようこそ、ほんとに來て下さつたのね、父です、外へ出たいらしくて、困るのよ、」
「すぐ、おいとまするわ……」
三千子は、父親を、奥へ連れていつた。
「いいのよ、さあ、あがつて、」
わたしは、彼女一家の樣子が、なにか暗いやうなのは、體のわるい父親の世話で、疲れてゐる

のではないかと察した。
「たいへんね、」
「さうでもないの、父がゐてくれるので、助かることもあるわ、加奈子だつて、父と遊んでゐるのが、好きなの、」
「さうね、お年寄がゐると、安心でせう、」
「安心て、あんな不自由なひとですから、さうではないけれど、でもいいの、わたし、いろんなもの、負はされる運命みたい……」
さう言つて、三千子は笑つた。
苔の生えた庭に、小池などあつて、盆栽棚もある。この邊は、震災の影響は、あまりなかつたらしい。古い柘榴の木が、庭の重點で、池には金魚もゐる。
「……だんだん、いやな狀態になるわね、」
「うちは、田舍もなし、主人は、今、外國支店詰で、なにがあつても、動けないの、」
「落着いていいお家だわ、」
「借家ですよ、主人は、買ふつもりだつたのですけれど、大家が、賣らないの、このあたりは、地付きのひとが多いでせう、」
「……横濱は、ひどかつたわ、」
「父は、わたしの父よ、會社はつぶれる、家はなくなる、やつと、勤めが出來るやうになつて、定年でやめてから……病氣でせう、」
「お母さまは？」
「三年前に亡くなりました、それから、めつきり、父も弱つたわ、」

わたしは、三千子の話をきいてゐて、母親が亡くなつたので、彼女の家に、父親をひきとつたのだと、勝手に想像してゐた。

三千子が、服部の家へかたづいたのは、二十二歳の時で、勤めてゐた會社の上司に、氣に入られて、結婚した。

良人の方に係累はなく、三千子の家は、震災後、やつと元の地所に、バラック建てをして住んでゐるやうな狀態で、一家は、上司からの話があつたとき、これは好運だと思つた。

「……いい緣と思ふよ、あのひとは、出世するだらう、それに、會社の勤めが、外國關係で、出張も多いといふし、氣樂ぢやないかな、」

三千子には、上司として、毎日、會社で會つてゐても、無關心の人物であつた。上役に眼をつけられたのは、自分の仕事ぶりなのか、顏かたち、容姿なのかわからない。しかし、わるい氣持ではなかつた。

一家の、沈みこんだ暮しの中にゐるのも、實は、このまま埋れてしまふやうで、希望がもてないのである。

話が具體的になつたとき、服部は、

「かまひませんよ、わたしの家へ一緒に住んでも……當分は、まあふたりだけで、」

さう言つた。

「とんでもない、たとへバラックでも、ここは、住み馴れてゐますし、わたしも、勤めもあるので、」

「さうですか、それは、いいやうに、ただ、あなた方が、三千子を頼りにしてられるやうだから、そのときは、いつでも一緒になつていいといふ氣持です、」

これをきいた兩親は、

「やつぱり氣持のひろい方ぢやね、全く、いい緣に出會つた、三千子は、ひとに好かれるところがあるからだらうね、」

有頂天と言つていいほど、喜んだ。

三千子には、一緒に暮すのには、便利なひと、戀しいとか、なつかしいとか言ふのではなく、誠實なひととしか思へない。

結婚といふものへの期待よりも、片棒かついで貰へるといふ、望みの方が大きかつた。

「さうね、何から何まで氣に入る相手なんて、湧いて出て來ないわね、やつぱり、分相應のひとかもしれない、」

「なにを言つてるの、昔ならいざしらず、こんなバラツク住ひの今では、しつかりしたお勤め人の、上司にかたづくのは、幸運ですよ、」

「……お前の姉さんだつて、平凡な暮しで、病身だしね、苦勞してゐるでせう、それとくらべたつて、お前は、まるで違ふぢやあないか、結婚すれば、お勤めは、もちろんやめて、あれこれと、嗜みごとに精出して、いい奥さまでゐられる、」

「でも、あのひとに、そんなに期待するのはまちがひよ、なにも、どれほどの財産でもないわ、ただ、腕一本で、ああなつたひとですもの、」

「その腕が、なによりの財産ですよ、お金なんて、お前、灰燼になるでせう、腕があれば、またやりなほせる、そこが頼もしいといふのですよ、」

三千子は、言はれることは、胸に應へた。病身の姉一家のことを見ても、それが、どれほど兩親の身心にこたへてゐるか、わかるからである。

良人の服部の方に、身寄はなし、友人や、會社の部下二、三と、三千子の一家だけで、內輪の式を擧げた。

所帶に必要なものは、服部の方で、殆ど揃へた。昭和五年のことである。

三田の慶應義塾の下にある、三田會議所の前に、手頃な借家があり、三千子はそこに移つた。横濱へも近いのと、服部の勤め先の關西商船にも近いといふことが、最大の條件であつた。

「いづれ、家は、適當なのを買ふか、建てるかするけれど、やつぱり、この邊がいいなあ、」

「さうね、わたしも、探してみるわ、散歩ながら……東京住ひははじめてですもの、田舍ものの、東京見物だわ、」

「さうだな、氣をつけて、迷子にならんやうに、要るものがあつたら、言ひなさい、わたしが、買つてやるよ、」

なにか高飛車な感じで、三千子は、このひとと、一生、かういふ生活をして、樂しいだらうかと、ふと思つた。

樂しいばかりが、結婚の目的とは、三千子も思つてはゐない。だが、要るものは買つてやる、といふその考へ方に、感情的なセンスの違ひを感じた。

要るものがないと言つたら、どうするのだらうか。お金は、良人が握つてゐて、不自由はないとはいふものの、あれが要る、これが欲しいと、甘えたい氣持も起らない。

ふたりになつて、話をするときも、服部は、會社の計畫がどうしたの、業績がどうだのと、彼女に興味のないことを、言ひたてる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com